

(短報)

函館製革所において製作されたセーム皮試作品について

加藤 克*

* 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園・博物館 Botanic Garden & Museum (HUNHM), Field Science Center for Northern Biosphere, Hokkaido University, 060-0003, Sapporo, Japan

はじめに

Hokkaido University Natural History Museum (HUNHM) は、開拓使が 1877 (明治 10) 年に設置した札幌仮博物場 (のち札幌博物場と改称、以下札幌博物場として統一表記) を起源としている。1882 年に開拓使が廃止されるまで、札幌博物場は北海道開拓に有益な自然史資料のほか、開拓使による官営工場や関連施設で製作された産業資料も収集していた。それらの資料は開拓使によって内国勸業博覧会などに出品され、北海道開拓の促進、成果を発信する役割を担っていた [関 1990]。開拓使の官営工場で作成されたシカ肉缶詰【39564】(以下【 】で括った数字は HUNHM の現在の資料番号) などがこの時期に収集されたものであり、北海道の歴史について資料を通じて理解する上で現在も重要な役割を果たしている。しかしながら、1884 年に札幌博物場が札幌農学校に移管されて以降は、札幌農学校および後身の北海道大学における研究、教育活動に関わる標本・資料の収集と研究利用支援が主な役割となり、特に農学部動物学教室の教授が館長として活動するようになった 20 世紀以降は、所蔵資料として産業資料や歴史、絵画資料が果たす役割が低下していった。このため、上記したシカ肉缶詰のような一部の資料を除き、博物館の資料台帳に登録されないまま放置されていたり、登録されているものであっても資料情報や収集の経緯が継承されない形で、単なる動物学研究の資料として管理されてきたものも少なくない。このように博物館資料が有する価値が十分に利用できない状態にあることは、博物館としての大きな課題といえる。

筆者は、HUNHM に所蔵されている全資料に付属するラベルや 19 世紀から戦前に利用されていた資料台帳、北海道立文書館、北海道大学大学文書館に残されている史料などにより、HUNHM におけるコレクションヒストリーの解明を目的とした調査を実施し、産業資料だけでなく、動物標本、民族資料など諸分野の標本・資料に伏在する課題の解決を試みてきた [加藤 2004, 2008, 2012a, 2012b, 2012c ; 加藤・市川 2004 ; 加藤ら 2009, 2010, 2012, 2014 など]。産業資料についていえば、開拓使時代及び開拓使廃止から札幌農学校移管までの約 2 年間の農商務省管理下にあった時代の博物場で収集されていた万国博覧会関連資料 [加藤 2016] や農商務省博物局との交換資料 [加藤 2015] の収集過程を検討し、歴史資料としての価値を向上させてきた。

本稿も HUNHM が抱える課題解決の一環として、哺乳類標本の悉皆調査の中で確認された動物由来の産業資料について、HUNHM に収蔵されるまでの過程を検討し、当該資料の歴史的価値を明らかにすることを目的とするものである。

1. 対象資料

本稿で検討対象とする資料は、1961 (昭和 36) 年から運用されている HUNHM の資料台帳でシカ皮 (ヒカク)【24847】として管理されてきたものである (図 1)。収集年次や収集場所などの情報は全く台帳には記載されず (図 2)、動物学研究のために収集された多数の毛皮資料と一緒に保存管理されてきた。しかしながら、この資料には「函来 第七百七十二号ニ属セル 函館製作所製」という記述と「H 一」と読める記号 (図 3)、「開拓使東京出張所勸業課仮博物場係」の印、「動産 119」と記された青枠のラベルとその下にある正方形のラベル (図 4) が付属している。これらの情報から、当該資料がどのような歴史的背景を有しているのかを解明してゆく。

2. 函館製革所

シカ皮【24847】に注記されている「函館製革所」がどのような機関であったかについてまず確認することとしたい。函館市史編さん室 [1990] によれば、開拓使は北海道内の豊富な皮革資源に着目し、製革所を設立することとした。お雇い外国人教師としてアメリカ人のマティアス・ウェルプが採用され、函館支庁は 1872 (明治 5) 年に東川町の徒罪場内に函館製革所を開設した。ウェルプの指導の下、日本人技術者が養成されることになり、当初は牛皮を主材料として靴用の皮、馬具などに用いる革が製作されていたという。しかし、ウェルプとの雇用継続の契約がまとまらず、1874 年ごろには事業継続が危ぶまれる状況になった。函館支庁は「製革場規則」を改正し、ウェルプの指導を受けていた日本人技術者のうち優秀であった中野才吉を指導



図1. シカ皮【24847】

24846	日高紋別村	昭和7-2		
24847	シカ皮 (ヒカク)			
24848	〃			
24849	ジャコウジカモ皮 模本			

図2. 資料台帳のシカ皮【24847】記載



図4. シカ皮【24847】に付属するラベル

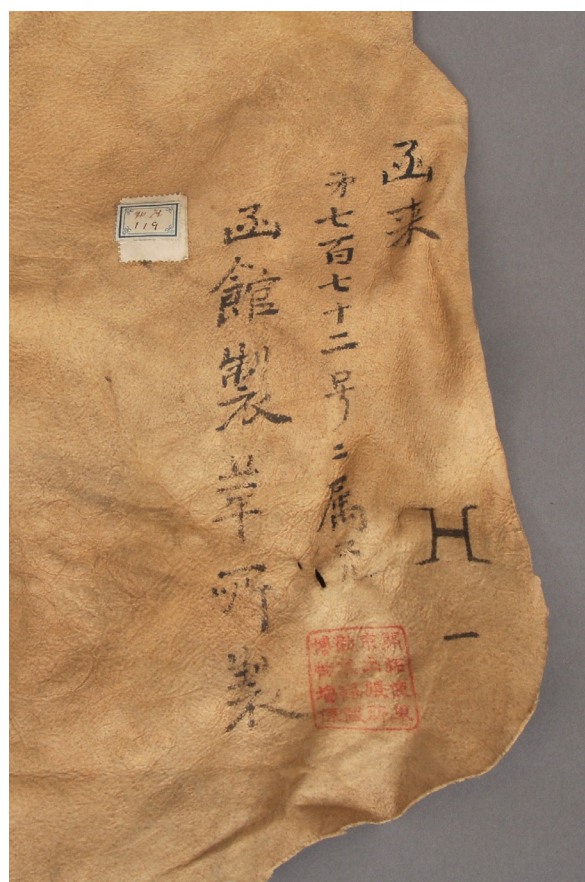


図3. シカ皮【24847】にある注記と「開拓使刀匠出張所東京仮博物場」の印

役として事業の継続を図ることになった。

1875 年になって、靴や馬具用の製革のみでは需要に限度があるとの判断から、函館製革所では毛皮のなめし業にも手を広げることとし、二人の清国人職工を採用して 1876 年 3 月から翌年 11 月まで製造にあたらせた。その後、彼らの下で作業にあたっていた四人がその技術を習得して事業を行うことになった。また、この時期は鹿皮を油でなめしたセームレー（セーム皮）の需要が多かったことから、北海道で豊富に捕獲することができる鹿を利用して産業として発展させるため、函館支庁は 1877 年 11 月に曾根清を採用してその製造にあたらせたという。

1878 年には需要の増加に対応するため新しい事務所と工場が設置された。ウェルプの指導を受けた中野（宇都宮）才吉らが中心となって製造が継続され、1881 年に開催された第二回内国勸業博覧会には函館支庁として 8 品 15 枚の皮革、毛皮製品を出品している。ただし、製革所の収支は赤字が続き、1880 年 11 月には開拓使は製革所の払い下げを図ったが、不調におわり、1881 年 4 月に貸与する形で事業が継続されていた。最終的には開拓使廃止後に管理することになった農商務省が 1884 年に製革所を払い下げるようになったが、実際の払い下げ直前に事務所・工場の建物が火災で焼失したため、函館製革所そのものは消滅し、敷地のみが払い下げられ、民間で新たに事業がおこされることになった。

以上の経緯から、函館製革所は 1872 年から 1884 年までの 12 年ほどの間存続していた機関である。シカ皮【24847】が HUNHM に所蔵されていることから考えると、開拓使による運営時代の製造物であると推測されること、またシカ皮【24847】に捺されている印の「開拓使東京出張所東京仮博物場」は 1881 年に閉鎖されている〔関 1990〕ことから、当該資料は 1872 年から 1881 年までの製作物と位置づけられる。なお、東京仮博物場の設置は 1876 年であり、印が捺された年代は 1876 年から 1881 年の間である。

3. 注記の文書番号

次にシカ皮【24847】に注記されている「函来 第七百七十二号」の記載について確認してゆく。

北海道立文書館簿書「明治十年東京文移録 開拓使函館支庁民事課勸業係」（簿書番号 2122）に明治 10（1877）年 12 月 27 日付で函館支庁から東京出張所に送られた「第七百七十二号」書類（件番 141）が保存されている。ここには、函館製革所においてセームレー皮の製造試験を行い、完成したので東京出張所で見覧のために 2 枚を送付することとしたこと、博物場などで陳列に供してもよいのではないかと考えているということが述べられている。この記述は注記されている情報と合致することから、シカ皮【24847】は 1877 年 12 月に函館支庁から東京出張所に送付されたセームレー（セーム皮）の試作品であり、東京仮博物場の所蔵（陳列）資料となっていたものであることが確認される。なお、同文書には「本文ニ付百九十三号上申アリ」という注記がある。これに該当する文書は「明治十年取裁録 開拓使函館支庁民事課勸業係」（簿書番号 2154）に含まれる明治 10（1877）年 12 月 24 日付書類（件番 84）である。ここには、試験品が出来上がったので現品を添えて上申するということが述べられており、注記として「本文之皮ハ東京ヘ七百七十二号ニテ送ル」とあり、この 2 通の文書がシカ皮【24847】の由来を示す史料であることは明らかである。

函館製革所におけるセーム皮の製作は、曾根清が「授業師」として採用され、制作にあたって必要な物品の購入が申請されたのが 1877 年 10 月 31 日である（前掲簿書 2154 件番 72）であることから、東京出張所に送付されたセームレーは 1877 年 11 月から 12 月の間に製作されたものであり、完成が 12 月であったことはまず間違いない。これらの点から、【24847】は資料名シカ皮（セームレー・セーム皮）、製作者は曾根清を中心とする函館製革所、製作年次は 1877 年 12 月という資料情報を付与することが許されるだろう。

なお、注記は「函来」とあることから東京出張所で記載されたものである。これに対して、「H 一」は筆が若干異なるようにみえるので、「函館製革所 製造 1 号」といった意味かもしれないが、現時点で明確にすることはできていない。

4. HUNHM に収蔵されることになった経緯

北海道立文書館所蔵開拓使文書によって、シカ皮【24847】の製作経緯、注記の背景が判明した。最後に、東京出張所に送付されたセームレーが HUNHM に所蔵されることになった経緯について考察することとしたい。

東京仮博物場は 1881（明治 14）年に閉鎖することになり、同博物場の所蔵資料は、博物局（現在の東京国立博物館）、札幌博物場、札幌農学校、函館仮博物場（現在の市立函館博物館）に分割された〔関 1990〕。札幌農学校に送付された資料は農学校の演武場（現在の札幌時計台）の中に設置されていた標本室に所蔵されることになったが、これらの資料は札幌博物場が農学校の博物場として移管されたのち、1887 年ごろに博物場へと移管され、統合されたことが明らかになっている〔加藤ら 2009〕。HUNHM に所蔵されていることから、シカ皮【24847】は札幌農学校、札幌博物場いずれかに送られたものであると推測される。

札幌農学校に送られた標本・資料の概容については「仮博物場標本類等送付の件通知」（北海道大学大学文書館所蔵札幌農学校資料 107）として記録が残っており、1881 年 6 月 25 日に東京仮博物場から移管された資料の中に「製革類」14 枚が含まれていたことが確認される。この中にシカ皮【24847】が含まれていた可能性がある。なお、1882 年の農学校標本室所蔵品一覧では「皮類」が合計で 13 枚となっている（札幌農学校資料 123）。

東京仮博物場から札幌博物場に送られた資料の全容は明らかにならない。東京仮博物場において制作された鳥類図と考えられ

るものが、札幌農学校標本室の資料と統合される前の 1882 年には所蔵されており〔加藤 2001, 2012b〕、東京仮博物場から札幌博物場へ資料が送られていたことは間違いないが、これまでの調査では東京仮博物場由来と判断される資料は HUNHM ではほとんど確認されていない。これは、東京仮博物場の所蔵資料が札幌と函館の博物場を運営する部署から送られたものであり、おそらくは重複品が多数含まれていたため、閉鎖にあたって資料を受け取る積極的な意味を有していなかったからか、開拓使廃止後の資料管理において東京由来であることを示す情報が失われたのではないかと考えられる。

ただし、1882 年に開拓使が廃止され、札幌博物場が農商務省に移管された際の資料目録（北海道立文書館所蔵簿書 札幌博物場・札幌牧羊場・札幌育種場引継書類 簿書番号 7263）と、1884 年の札幌農学校への移管時に作成された資料目録（博物場・農学校へ転轄書類 簿書番号 8532）によれば、札幌博物場所蔵資料の中に「鹿鞣皮」1 点が確認できる。開拓使の函館支庁から東京出張所に送付されたセームレーン 2 枚であるが、現時点でシカ皮【24847】と同じ注記を持つシカ皮は確認されていないことから、1 点のみが東京仮博物場から札幌博物場に送られた可能性も否定はできない。

ここで注目したいのは、シカ皮【24847】に付属するラベル（図 4）である。青枠のラベルの下に貼られている正方形のラベルは、現状印字や記載が確認できないものの、サイズと形状から開拓使廃止後の札幌博物場で利用されていたラベル〔加藤ら 2014〕と考えて間違いない。このラベルの多くには、農商務省の管理下にあった時期に博物局の田中芳男の指導により運用が始まった資料管理番号が記載されている。ただし、この番号による資料管理は混乱が生じ、1890 年ごろに札幌農学校所属博物館のスタッフによって、あらためて標本台帳や資料カードが作成され、新しい資料番号が付与されていたことが鳥類標本〔加藤ら 2010〕、アイヌ民族資料〔加藤 2004, 2008〕で確認されている。鳥類標本やアイヌ民族資料の場合にはシカ皮【24847】に付属している青枠のラベルではなく同じ様式の赤枠のラベルもしくは、札幌農学校所属博物館の印が捺されたラベルによって番号管理がなされており、赤枠様式のラベルが用いられている場合には、シカ皮【24847】と同様に正方形のラベルに記載されている田中芳男の指導による資料番号を隠すような形で貼り付けられている。ここから、シカ皮【24847】にあるラベルも 1890 年ごろに付与されたものであり、「動産 119」はその資料番号であると考えられる。

1890 年ごろに運用が始まった資料台帳（通称備品原簿）は 3 冊現存しており、その構成は備品原簿 1 が尾索動物、頭索動物、円口類、魚類、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類、棘皮動物、軟皮動物、節足動物、蠕形動物、腔腸動物、海綿動物、原生動物を対象としており、備品原簿 2 では項目は立てられていないものの樹木見本が登録対象となっている。備品原簿 3 は動物ノ産物、植物ノ産物、動植物ノ製品、農業用具、工芸物品、模型品で構成されている。

シカ皮【24847】に付属するラベルに記載されている「動産」は備品原簿 3 に含まれる「動物産物」の略号であり、備品原簿 3 の動物産物の 119 号は「シヤモア」（図 5）となっている。台帳には後筆で 119 と 120 の「シヤモア」に「？」らしき記載があり、のちの管理者がどのような資料であるのかを判断できなくなっていたように思われる。この「シヤモア」とシカ皮【24847】は合致すると考えてよいだろうか。

ここで、備品原簿 3 の「動物産物」の台帳がどのように成立したかを検討することにした。「動物産物」に登録されている 127 件の資料のうち、1 から 79 と 125 から 127、また記載はないものの 80 と 124 も 1884 年に博物局との交換で受け入れた資料である〔加藤 2008, 2015〕と推測されることから、これらを除外したものを表 1 として示した。毛皮、皮革製品は 81 から 104 と 111 から 123 にまとまっている。これと比較するために、表 2 として 1884 年に札幌博物場が札幌農学校に移管された際の資料目録の「勸業部毛皮ノ類」を、表 3 として 1882 年時点の札幌農学校標本室に所蔵されていた「皮類」を史料の配列のまま示した。表 1 と表 2・3 を比較すれば、若干の点数の増減があり、また農学校標本室由来の資料には配列の前後は生じているものの、備品原簿 3 の 81 から 104 は札幌博物場由来、112 から 123 は札幌農学校標本室由来の資料であることは明白である。

1890 年ごろの標本番号の混乱は、増加する動物標本において生じていたと考えられ、おそらくは標本・資料の追加収集が行われなくなりつつあった「動物ノ産物」に含まれるものには大きな混乱はなかったと推測される。このため、1884 年ごろに整備されていた正方形のラベルに記載されていた資料番号からなる、博物局由来資料、札幌博物場資料、札幌農学校標本室旧蔵資料、若干の追加というもとの配列が維持されているものとみられる。

札幌農学校標本室において「シヤモイ」が「皮類」として管理されていたこと、標本室の目録と備品原簿 3 の配列との対応から、シカ皮【24847】は「シヤモイ」「シヤモア」に該当するとみなされる。おそらくは農学校のお雇い外国人教師が発音した「セーム」を「シヤモイ」と書き取り、その情報がのちの札幌博物場において「シヤモア」と記述されたのだろう。

以上の考察から、函館支庁から東京出張所に送付されたセームレーン 2 枚は、東京仮博物場の閉鎖後、札幌農学校標本室に移管され、札幌博物場の農学校移管後に統合されて現在に至ったという歴史が確認され、シカ皮【24847】はそのうちの 1 枚であ

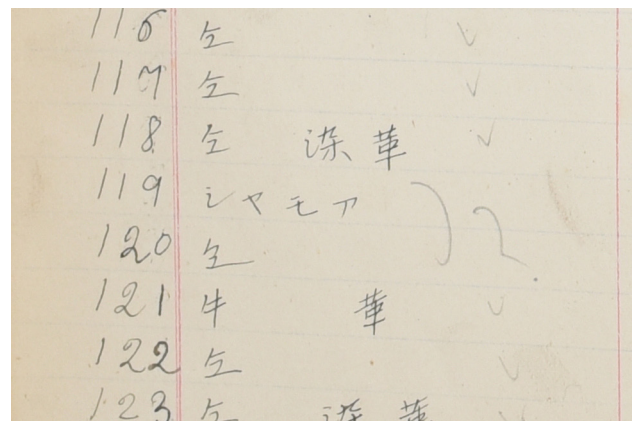


図 5. 備品原簿 3 の 119 「シヤモア」

表 1 備品原簿 3 動物産物（一部抽出）

番号	品名	地名	備考
81	貉皮	-	-
82	貉皮	-	-
83	貉皮	-	-
84	狐ノ皮	-	-
85	赤狐ノ皮	千嶋	(1)
86	黒狐ノ皮	千嶋	(1)
87	斑狐ノ皮	千嶋	-
88	熊皮	-	-
89	水獺皮	-	(1)
90	水獺皮	-	(1)
91	水獺皮	-	-
92	海獺皮	千嶋	-
93	海獺皮 児皮	千嶋	-
94	海獺 児皮	-	-
95	海獺	-	-
96	水獺皮	-	-
97	鼬皮	-	-
98	鹿皮	-	-
99	海豹皮	-	-
100	海豹皮	-	-
101	膾肭臍皮	-	-
102	鹿鞣革	-	-
103	木鼠皮	-	-
104	木鼠皮	-	-
105	黄鼬	-	-
106	白鼬	-	-
107	アシカノ牙	-	-
108	貉皮	-	-
109	夏蚕繭	-	-
110	春蚕繭	-	-
111	鹿染革	-	-
112	鹿染革	-	-
113	鹿 鞣革	-	-
114	馬染革	-	-
115	海驢鞣	-	-
116	海驢	-	-
117	海驢	-	-
118	海驢 染革	-	-
119	シヤモア	-	-
120	シヤモア	-	-
121	牛革	-	-
122	牛革	-	-
123	牛革 染革	-	-

(1) 備考欄に「廿六年十月十七日夜本館ニ於テ盗難ニ罹ル」とあり

表 2 札幌農学校移管時の資料目録「毛皮ノ類」にみる毛皮資料

資料名	点数	備品原簿 3 との対応
貉ノ皮	3	81, 82, 83
狐ノ皮	2	84
赤狐ノ皮	1	85
黒狐皮	1	86
斑狐皮	1	87
熊皮	3	88
獺皮	3	89, 90, 91
海獺皮	9	92, 92, 93, 94, 95
鹿皮	1	98
海豹皮	2	99, 100
膾肭臍皮	1	101
鹿鞣皮	1	102
木ネツミ皮	2	103, 104

表 3 札幌農学校標本室所蔵標本にみる「皮類」

資料名	点数	備品原簿 3 との対応
鹿	3	111, 112, 113
トバ	4	115, 116, 117, 118
シヤモイ	2	119, 120
牛	1	121
馬	1	114
雑皮	2	122, 123 カ

と判断される。なお、東京仮博物館から農学校標本室に移管されたもう 1 枚のセームレー「動産 120」は現時点で確認されていない。シカ皮【24847】と一緒に保管されていたシカ皮（ヒカク）【24848】（図 2 参照）も同じセーム皮であるが、これには「動産 102」の青枠のラベルが付属しており、これは上記検討から、札幌博物館で「鹿鞣革」として管理されていたものであり、シカ皮【24847】とは異なる由来を持つ資料であることから該当しない。ただし、ここまでの検討により、シカ皮【24848】についても 1882 年以前の収集品であり、おそらくは開拓使の製革所由来と推測されるという情報は付与できることになる。

おわりに

動物標本として管理されてきたシカ皮【24847】及び【24848】の製作経緯や年代について、注記や付属するラベルを利用して検討を行った。博物館資料となるまでの経緯や注記の意味について、博物館で継承されることなく保存されてきたという課題はあったものの、処分されることなく保管されてきたこと、現在利用されていない博物館資料台帳や開拓使文書、札幌農学校文書などのアーカイブを利用することで、欠落した情報を復元することができた。

これらの資料は製作された当時は産業資料として評価されていたはずであるが、博物館資料として 140 年以上経過したことにより、開拓使の製革工場で製作されたという歴史的価値、また日本におけるなめし技術の変遷を検討する材料としての価値も加わっている。博物館資料・標本を対象に、アーカイブを利用して歴史的に評価し直すことにより、収集当時とは異なる価値を見出すことが可能になるのである。

本稿は、「研究資源価値向上を目的とする標本情報の復元におけるアーカイブの役割に関する研究」（科学研究費補助金 基盤研究（C）19K01138）による成果の一部である。調査にあたっては、北海道立文書館、北海道大学大学文書館、北海道大学附属図書館によるサポートを受けた。期して謝意を示す。

引用文献

函館市史編さん室編. 1990. 通説編 第2巻, 函館市, 函館.

加藤 克. 2001. 北海道大学農学部博物館所蔵絵画資料の歴史的検討. 北海道大学文学研究科 平成12年度プロジェクト研究報告書 北海道大学農学部博物館の絵画, 10-20

加藤 克. 2004. 札幌農学校所属博物館のアイヌ民族資料. 北大植物園研究紀要, 4:1-54

加藤 克. 2008. 北海道大学植物園所蔵アイヌ民族資料について: 歴史的背景を中心に. 北大植物園研究紀要, 8:35-91

加藤 克. 2012a. ブラキストン標本の変遷と現状. 加藤 克 ブラキストン「標本」史 第1章, 北海道大学出版会, 札幌.

加藤 克. 2012b. ブラキストン標本と鳥類図. 加藤 克 ブラキストン「標本」史 第2章, 北海道大学出版会, 札幌.

加藤 克. 2012c. 標本ラベルからみた樺太動物調査鳥類標本について. 北大植物園研究紀要, 12:91-114

加藤 克. 2015. 北大植物園・博物館所蔵農商務省博物局交換資料について. 北大植物園研究紀要, 15:1-27

加藤 克. 2016. 札幌博物場旧蔵万国博覧会関連資料について. 北大植物園研究紀要, 16:23-38

加藤 克・市川 秀雄. 2004. 北大植物園・博物館所蔵アメリカ自然史博物館鳥類標本について. 北大植物園研究紀要, 4:65-75

加藤 克・市川 秀雄・高谷 文仁. 2009. 札幌農学校所属博物館における鳥類標本管理史 (1): 東京仮博物場から札幌農学校所属博物館初期まで. 北大植物園研究紀要, 9:29-94

加藤 克・市川 秀雄・高谷 文仁. 2010. 札幌農学校所属博物館における鳥類標本管理史 (2): 明治期の札幌農学校所属博物館. 北大植物園研究紀要, 10:9-96

加藤 克・市川 秀雄・高谷 文仁. 2012. 札幌農学校所属博物館における鳥類標本管理史 (3): 大正～昭和期の博物館. 北大植物園研究紀要, 12:1-84

加藤 克・市川 秀雄・高谷 文仁. 2014. 札幌農学校所属博物館における鳥類標本管理史 (4): 標本ラベルの変遷からみた管理史. 北大植物園研究紀要, 14:1-44

関 秀志. 1991. 明治期における北海道の博物館 (1). 北海道開拓記念館調査報告, 29:113-139